五十嵐力 著

大日本古典の俳諧

芸艸社版

昭和十七年十月十日印刷
昭和十七年十月十五日發行

（あ100446號）號番認承協文出

定價　五圓五拾錢
發行部數　二、〇〇〇部

大日本古典の偉容

著者　東京市豐島區巢鴨町　五十嵐力（イガラシ　ツトム）

發行者　東京市麴町區有樂町一丁目十四番地　岩壁保

印刷者　東京市芝區片門前二丁目八番地　山縣隆定

發行所　東京市麴町區有樂町一丁目十四番地　株式會社　道統社
電話銀座五四一一番
振替東京一六五五六一番

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

序

一、簡單にありのまゝを記して、序とする。

一、本書は友人伊福部隆彦君の勸めにより、大正十三四年頃から、舊稿で、まだ纒めずにおいたものを取集めたものである。而して新しい大東亞戰に何等かの關聯をもつものにして、そこに職域奉公の微志をあらはしたいと思ひつゝ、その心組で、纂輯をも試み、またおふけなき名稱をも撰んだのであつた。

一、集めたる拙文十五篇、その執筆の機緣はまち〳〵で、或は新聞の讀切物として寄稿したものもあつた。或は國文學研究の諸雜誌に掲載したものもあつた。或は中學程度の講義錄に連載したものもあつた。或は名著現代語譯の解題として書いたものもあつた。殊に大甘で甚だ相應はしからぬのは、拙纂國語讀本の敎師用に載せたもので、その老婆心切の低級さは我れながら極りのわるい心地がするけれども、こんな

ものもたまにはと考へて、思ひ切つて載せることにした。

一、古典の意義と趣味とは廣大無邊である。而して我が古典の廣大無邊なる意義趣味は國運の開展するにつれて、常に思ひ設けぬ樣相を示顯するやうに見える。本書は著者が、我が古典の時々見せた新しい樣相に打たれて、幾度か首を垂れ掌を合はせた歡稱歎異の情を披瀝した幼い記錄である。

昭和十七年八月一日

著者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大日本古典の偉容　目次

第一　祝詞祈年祭の高遠なる意義……一一
—古典に於ける皇道弘布の宣言—
第二　神功皇后の三韓遠征（日本紀）……四九
—布哇馬來の電擊を思はしむる—
第三　和泉式部日記の本文意義趣味考……二九
第四　問答物語の始祖大鏡……七七
第五　王朝文學に於ける見殘されたる表現美……一三三
第六　鎌倉の軍記に於ける新しき文體の創始及び完成……一八三
第七　太平記再讀重愛の心緒を述ぶ……一九七
第八　謠曲　隅田川……二三一
—その本文、解釋及び批評—

第九　謡曲羽衣……二七七
—その本文、解釋及び批評—
第十　「羽衣」によりて試みに謡曲に於ける「カゝル」の意義、役目及び趣味を説く……三三五
第十一　松島より平泉へ（松尾芭蕉、奥の細道）……三五九
—その本文、解釋及び批評—
第十二　幻住庵の記（松尾芭蕉）……三九五
—その本文、解釋及び批評—
第十三　老の姿はかはるとも（近松、國姓爺合戰）……四四五
第十四　眞書太閤記とは何ぞ……四八三
第十五　椿説弓張月を讀む……五一五

第一　祝詞祈年祭の高遠なる意義

――古典に於ける皇道弘布の宣言――

一

何しろ昨今の大非常時である。朝鮮から滿洲から支那全土へと、仁義の皇化が次ぎ〳〵に推し及ぼされて、王道樂土が年毎に月毎に日毎に廣がつて行くといふ大時代の年頭を飾る我が大學新聞の新年號に書くのだ。同じ事なら、此の目前の大事件に關係のある事を書いて見たい。同時に成るべくは自分の專門の畑の中から、まだ人の言はぬやうな重大な思想を擇り出して書いて見たいなどと、負ふけない事を考へて居る中に、ふと浮かんだのは、古い祝詞の「祈年祭」の一節である。

「祈年祭」は神々に年穀の豊熟を祈る詞であるが、その中に「辭別」と云つて、特に天照大御神に申上げる詞の中に、次ぎのやうな文句がある。「大神の見そなはす四方の國々は、天の蔽ふ限り、地のつゞく限り、青空が高く棚引き、白雲が大地にかぶさつて居る限り、海上では棹楫を干さずに漕ぎ進んで、もう進めぬといふ行き止まりまで、海面一ぱいに隙間もなく船を浮かべ、陸上では馬の背の荷を結ひ堅めて岩が根木の根を踏みくぼまして、馬の爪がもう利かぬといふ處まで、長い道中隙間もなく駄馬の列を立てつゞけて、せゝこましい小國は廣々と取り廣げ、險岨

な物騒な國々をば平和安穏の國となし、而して王化に潤はぬ遠國をば、幾十筋の太い綱を打ちかけて引き寄せるやうに御寄せ下さる。これ皆大神様のお蔭でありまする」といふ一節がある。

私はこれを讀んで、そゞろに皇軍百萬海を渡つて、揚子江、黄河、太湖、八達嶺、居庸關、無數のトーチカ、クリークを蹂み躙り飛び越えて進み行く、陸、海、空三軍の、大理想を念じつゝ慘として驕らざる雄姿を思ひ浮かべる。同時に吾々の祖先が、千幾百年前において、今日吾々のやりつゝある事、やらうと努めつゝある事を、文字の上では、より偉大に、より壯烈に宣言して居るのを驚歎するのであるが、こゝに一つの不審は、この海、陸、船、馬に關する數行の意義をば、朝貢の船舶駄馬の連續する事と取るべきか、或は皇化を普及し、民禍を芟除し、理想を弘布する、我が宣傳使の海陸兩路における大行列と見るべきかといふ點である。その要點なる原文を讀み下し式に書き改めると、

青海原は棹舵干さず、舟の艫の至り留まる極み、大海に船滿てつづけて、陸より往く道は、荷の緒結ひ堅めて磐根木根履みさくみて、馬の爪の至り留まる限り長道間なく立てつゞけて、狹き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は八十綱うち掛けて引き寄することの如く、皇大御神の寄さしまつり給へば……

右の通りである。

二

此の一節の意義について、從來は賀茂眞淵が『祝詞考』において「青海原云々、これは海路より貢奉るをいふ」「自陸往道者云々、これは陸路より租調等を貢奉る體を云ふ」と解釋したのを始めとして、中頃の鈴木重胤から最近大正昭和の國史國文の諸家に至るまで、悉くこの意味に取つて居るが、又私自身も以前はその意味に取つてゐて、已に一度その通り小著にも書いたのであるが、ひそかに思ふに、これは朝貢の船や馬が遠近の領國から來ることではなくして、皇化宣傳の御使が勢揃ひして出かけて行くことであらう。向うから來るのではなくして此方から往くのであればこそ、「舟の艫の至り留まる極み」、「馬の爪の至り留まる限り」とは云つたのであらう。「陸より來る道」と云はずして「陸より往く道」とは云つたのであらう。また船を滿てつゞけ馬を立てつゞけて、狹き國を廣くし、峻しき國を平かにすると言ひつゞくる以上は、どうしても一種の理想を持つ團體の積極的遠征を意味すべき筈で、小弱國がお辭儀をして强大國の主權者に献ぐる朝貢の船や馬に取つて、狹き國を廣くし、峻しき國を平らけくするといふのは、何の意義をも成さぬことである。かた〳〵これはどうしても皇化宣傳使が、仁義平和の大道を高く掲げて、有形的

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

には、狹き國、險阻な國を廣く平坦にし、精神的には惡政惡俗に苦しむ國々を善導して、道ある國とするといふ意味に取るべきであらう、と私は思ふのである。

かやうな事は、一見文法や古文辭に囚はれた好事家の暇つぶしのやうにも見えるが、しかし考へ樣によつては、古文を正しく解釋するのは、非常に大切な仕事で、殊に肇國當初に國民の大理想の宣せられた偉大なる文章の意味を、左と解くべきか、右と釋くべきか、消極的に解釋すべきか、積極的に解釋すべきか、坐つてゐてお土產を貰ふ事と取るべきか、難路を切り開きつゝ、進んで尊い贈物を憐れな人々に與へる事と取るべきかは、國文學に遊ぶ小さき學徒としてのみならず、日本國民としても輕視し小視すべき事ではあるまいと思ふ。

三

私は如上の所見を十餘年前（大正十三年）に取纏めて、小さい論文を書いたことがある。その小篇を陸軍幼年學校が友人本庄主一君を介して、その教科書に採錄することを所望され、私は欣諾し、これが始めて同校の讀本に掲げられることとなつたが、當時私はこれを悅ぶと同時に、一種の奇異なる感じのするのを禁ずることが出來なかつた。その中に上海事變が起こつて、新に滿洲

國が成立した。私はこれを見て、千數百年前に創作された「祈年祭」の辭別の尊い暗示が、昭和の國民を奮ひ起たしめたのではないかと疑つた。その中に今度は、支那事變が突發して、皇化宣傳の使命を帶びた勇士達が、現に海川を渡り、一野山を踏みしだき、大空をとよもして、北支、南支、中支に仁義平和の道を布き傳へつゝある。私は之れを見て、肇國の太古に種を蒔かれて、祝詞の一節に文學の花と咲いた大理想が、昭和の現代に立派に結實したのである。あの或人々からは天地間第一の大文章とも稱せられた「祈年祭」の辭別が、全國の幾千、幾萬、時としては十餘萬柱の神々の社で朗誦される中に、冥々の間に國民の心を感孚して、この吾等が眼前の大結果を結實させる事とはなつたのであると信ずるやうになつた。抑々あの大祝詞は、何により、誰れが思ひつき、誰れが筆を執つて、あの莊嚴雄大なる詞章を成したのであらうか。これは今日から測り知るべからざる事であるが、とにかく太古にあの大可能を暗示して後昆を激勵した大文學があり、最近吾等の時代において、祝詞の古文が誇張された空想妄想でなかつた事を證明した生々しい事實があり、古今相照らして皇國日本の偉大を證明して居るのは、實に愉快なることである。

再び言ふ

天の蔽ふ限り、地のつゞく限り、海では楫檝の利く限り、海上一ぱいに船を浮べ、陸では馬の爪の利く限

り、長い道中隙間もなく駄馬の列をひき連ねて、皇化の宣傳使を差立てく、狹き國々を廣くし、險しい物騒な國々を平和安樂にして、仁義の皇道に潤はしめ得ることは、伊勢にます大神様のお蔭であります。

などは、天壤無窮の神勅に次いで、吾々の合掌しつゝ、歡喜踴躍して、その實現大成に努力すべき事ではないか。（昭和十三年一月六日稿）

第二　布哇馬來の電擊を思はしめる神功皇后の三韓征伐（日本紀）

一

私は最近に出來た文章、例へば現代文士の筆に成つた支那事變の一節を掲げて、此の講義の結びにしようと考へてゐた。そして其の準備として、その方面のおもなる數篇をあさつて見たが、適當な文章の無いのに困つて居る中に、突然今度の大東亞戰爭が勃發し、昭和十六年十二月八日及び十日の、あのハワイの眞珠灣及びマレー沖の米英軍に對する初一擊の快報に驚かされた。われらの驚きは大きかつた。同時にわれらの喜びは限りなき安心と希望とに滿たされた廣大無邊なものであつたが、此の驚きと喜びとに面接した後に考へると、重慶政府の軍隊相手の戰爭記は、俄に貫祿を失つたやうに感ぜられ、從つて此の講義の最後を飾るには相應はしくないやうな氣がして來た。そこで考へ直して、いろ〳〵調べて見た結果、これこそと思つたのが、『日本紀』に於ける神功皇后の新羅征伐の記事である。それは無論今度の太平洋戰に比べて、非常に地域が狹く、仕掛が小さいけれども、神明の加護により、天地自然の協力により、君臣一致の努力によつて、敵國を威壓した趣は、たとへば弘安の蒙古擊攘と太閤の大明征伐と、今度のハワイ、マレーの電擊とを一つに合はせた樣なところがあり、之れを記述した文章にも、神々しい、蒼古とも神

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com